

日本の放射線腫瘍学の展望

公益社団法人日本放射線腫瘍学会

理事長 西村恭昌

日本放射線腫瘍学会(JASTRO)は、日本の放射線治療、放射線腫瘍学を発展させるためには、欧米のように独立した学会を持つ必要があるとの思いの中、1988年に設立されました。2008年には一般社団法人、2012年には公益社団法人に認定され、現在会員数は3400人を越えています。本年2月には念願であった日本医学会の113番目の加盟学会となりました。JASTRO理事長として考えていることを講演させていただきました。

以前に比べるとがん治療における放射線治療の役割あるいは存在感は大きくなっていきます。各施設での放射線治療患者数は増加の傾向にあり、2010年のJASTRO構造調査では、年間約25万人の方が放射線治療を受けておられます。高精度機能を有する直線加速器は年々普及していますが、それを使いこなす放射線治療専門医は1000人に不足し、医学物理士、放射線治療専門放射線技師、認定看護師などのメディカルスタッフも不足しており、今後さらに増え続ける放射線治療患者に対応するにはオンコロジーチームの育成が急務と考えています。放射線治療には均てん化も必要ですが、粒子線治療を含む高精度の放射線治療を安全かつ効果的に行うにはセンター化が重要です。近くがん診療連携拠点病院の要件も均てん化も必要ですが、粒子線治療を含む高精度の放射線治療を安全かつ効果的に行うには均てん化とセンター化の両面から改定される予定です。

社会への情報発信も重要です。放射線治療の最新情報発信をホームページで積極的に行っています。今年の秋には最新の「放射線治療計画2012」もアップされる予定です。また、専門医制度の変更に伴い廃止された認定放射線治療施設を、患者さんが安心して放射線治療を受けられる新しいJASTRO認定施設として認定する仕組みを構築中で、来年には公表できるものと考えています。